

セミれば！
～セミナー・イベントから見るデータ利活用最前線～

HITACHI
Inspire the Next

一般社団法人データサイエンティスト協会 6thシンポジウム

～実務者が集うデータサイエンスの最前線～

「AIの前にやるべき“脱・データのブラックボックス化”」

2019年10月17日(木曜日) 丸の内・JPタワー ホール&カンファレンス

“ビッグデータ”や“IoT”といった言葉は、新聞・雑誌・Webサイトで見かけない日がないほど一般的になりました。客観的な数値をもとに定量的な分析に基づいた戦略の企画、実行を指向する企業が増えてきている証拠と言えるでしょう。

しかし、データ利活用には難しい点や気をつけるべきポイントが多く、新サービスや技術革新のサイクルが激しい分野でもあります。データ利活用を進めていくその前に、日頃からの情報収集が大切です。

このセミれば！(セミナーから見るデータ利活用最前線)では、セミナーのレポートを通じて、データ利活用の最新情報をお届けしていきます。

一般社団法人データサイエンティスト協会 6thシンポジウム

右：一般社団法人データサイエンティスト協会 6thシンポジウムのエントランス。JPタワー ホール&カンファレンスにて、基調講演、データサイエンティスト協会活動報告のほか、パネルディスカッションやスポンサーセッション、データビジネス創造コンテスト最優秀賞受賞チームによる講演などが行われました。

一般社団法人データサイエンティスト協会は、新しい職種であるデータサイエンティストに必要なスキル・知識を定義し、育成のカリキュラム作成、評価制度の構築など、高度IT人材の育成と業界の健全な発展への貢献、啓蒙活動を行っています。

データ分析に関わる人材が開かれた環境で所属を超えて交流や議論をし、自由に情報共有や意見発信ができる場を提供していく。その中で今年6回目を迎えるシンポジウムが、丸ノ内のJPタワー ホール&カンファレンスにて開催されました。

当日は、この度文化勲章を受章された理化学研究所 甘利氏の基調講演に始まり、学生から企業まで幅広い層に向けた講演が多数行われました。



AIの前にやるべき“脱・データのブラックボックス化”

右：日立社会情報サービス ソーシャルサービス事業部 益子原による講演「AIの前にやるべき“脱・データのブラックボックス化”」の様子

当社は、「AIの前にやるべき“脱・データのブラックボックス化”」と題して講演を行いました。

世界中のさまざまなものがインターネットにつながり、日々蓄積されていくデータは膨大な量に増加しています。

業績向上・業務効率化に向けてデータを活用するためにAI導入に取り組んでいる企業が増えていますが、データの準備に手間と時間がかかり、「データ活用における仮説検証サイクル」が上手く回らずに思うような効果を出せていないのが現実です。

本講演では、AIの活用を促進する前にサイクルの足かせとなっている“データのブラックボックス化”を抜け出す方法について紹介しました。



AIに対する期待が高まる一方、データのブラックボックス化が壁に

(※1)(※2)：ビジネスデータとセンサーデータについて――

①ビジネスデータ
・各種業務システムなどのデータ
・業務システムの動作に合わせて発生する【質】ビジネス的に意味を持った情報
【量】ビジネスの動きに比例して増大

②センサーデータ
・機器やセンサーから得た現場データ
・デバイスから自動的に発生し続ける【質】現実世界を写し取った数値の羅列
【量】指数関数的に増大（デバイス×時間）

(※3)：従来の仕組みでは扱いきれない――

リレーショナルデータベースと、EXCELやCSVの掛け合わせによる表現を中心として、直感的な操作性や、多彩なチャートを備えたさまざまなビジネスインテリジェンス(BI)が次々と市場に登場した。

しかし、データ量が爆発的に増えたことで、目的に合わせたデータの絞り込みや、分析軸となる情報の付加を行う「データの抽出・統合」が困難になった。

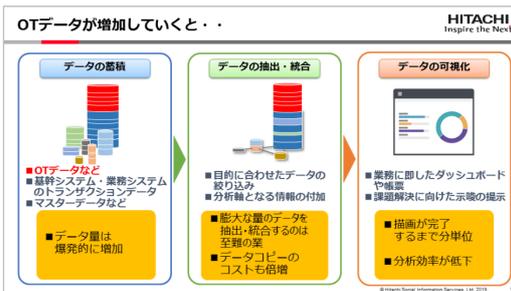
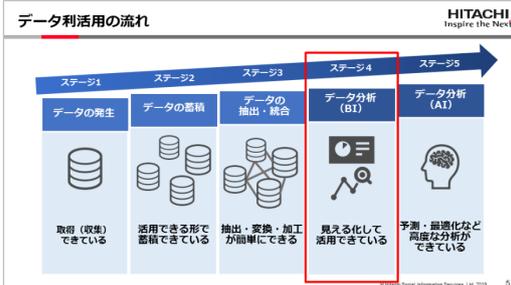
このため、センサーデータの活用を従来の可視化手法で行うと時間もコストも増加し、非効率になってしまつた。

AIへの期待が高まる一方で、AIの活用が成果に結びついている企業はまだ一握りであると言われていいます。その成否の違いはどこから来るのでしょうか。

ビジネスの現場で結果を出すほどのAIを作り出すには、質の高い、しかも大量のデータが不可欠となります。そういったデータは、AIで活用する前にまず「このデータが意味するものは何なのか」「本当に価値が引き出せるデータなのか」ということを解っていないければなりません。質の低いデータから強いAIは生まれて来ないのです。

これまでのデータ利活用のプロジェクトは、基幹システム・業務システムのトランザクションデータに、マスタなど分析の軸となるデータを付加するためにデータの抽出・統合を行い、データの可視化を行うケースが一般的でした。

しかし各種業務システムから得られるビジネスデータ(※1)とは異なり、ビジネスの現場から発生し続けるセンサーデータ(※2)は爆発的に増加しており、このようなセンサーデータは従来の仕組みでは扱いきれない(※3)ものへと変化しています。これを私たちはデータの「ブラックボックス化」と呼んでいます。



ブラックボックス化したデータの可視化ツール「Zoomdata」

Zoomdataの紹介ページはこちらから。
<https://www.hitachi-sis.co.jp/service/bi/gdata/zoomdata/index.html>

Zoomdataの紹介ページURL
こちらから



Zoomdataは、過去データを含む全件を網羅的に扱い、時系列に特化した対話型のデータ可視化を可能にするプラットフォームです。重要指標、サマリーデータ、そして過去データを含むローデータ全件まで、同一ダッシュボード上で可視化できるようにすることで、IoT分野におけるデータ利活用業務を属人化・ブラックボックス化から解放します。



スマートビルディング
…ビルエネルギーマネジメントシステムを導入し、エネルギー消費量を最適化した省エネ型ビルディングのこと。

「脱・ブラックボックス化」で得られるメリット

ブラックボックス化したデータは扱いが非常に難しい反面、ブラックボックス化を解消することができれば大きな可能性を持っています。

重要なしきい値やKPIを発見する、ビジネス判断のスピードを飛躍的に向上する。人間技では難しいビジネス判断をAIで代替し自動化していく――。グローバルでは、このような新しい大量のセンサーデータを業務に取り入れ、これまで引き出せなかった新しい価値を生み出す源泉として活用する取り組みが既に始まっています。

✓ 課題解決サイクルの短縮
✓ AI活用・自動化へ

重要なしきい値や新たなKPIの発見
ビジネスの判断スピードを飛躍的に向上

お問い合わせ・ご相談は、株式会社日立社会情報サービスまで

データ利活用に関するご相談は、以下のサイトで承ります。
https://inquiry.hitachi-sis.co.jp/webapp/form/21057_xdfb_93/index.do?qa=46

データ利活用に関するご相談
こちらから



イベント・セミナーに関する情報は、当社ホームページからご覧いただけます。
<http://www.hitachi-sis.co.jp/events/index.html>

- ・ Excelは、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
- ・ 記載されている会社名、製品名は、各社の商標または登録商標です。
- ・ 本カタログの内容は、2019年11月現在のものです。
- ・ 本製品を輸出される場合は、外国為替及び外国貿易法の規則ならびに米国輸出管理規則など外国の輸出関連法規をご確認のうえ、必要な手続きをお取りください。なお、ご不明な場合は、弊社担当営業にお問い合わせください。

株式会社 日立社会情報サービス
<http://www.hitachi-sis.co.jp/>